
全てが酷い！！ 脊髄反射小説

適当

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全てが酷い！！ 脊髄反射小説

【コード】

N3082U

【作者名】

適当

【あらすじ】

脊髄反射のみで書きました。かなり適当。内容も適当。凄く適当。でも転生者www

第一

「ほむほむだ!! なんか色々とほむほむだ!!」

「大丈夫ですか宇宙君?」

転校生ほむほむキター!!

あまりにも嬉しくて舞い上がっちゃまったぜ!

俺の名前は北沢宇宙 転生者だ!

俺の外見は片手両足に包帯を巻き、眼帯をしている。ちょｗｗ中二病ｗｗｗｗクラスメートからの評価は行動力のある中二病患者となっている。

能力は神に頼んで超チートにして貰った。……鹿目まどか? あんなの一発ですよ一発。最終回では時間やら空間やら超越したけど、この世界限定ならオレにも出来ちゃうよｗｗｗｗ

「じゃ、曉美ほむらさんはあの席で……」

「はい!! はい!!」

バンバンと昨日空席になった机を叩きながら手を挙げた。

「この席が良いと思います! なりよりオレの隣ですよ(キリッ) 優良物件! 超優良物件! 今ならジェントルマンが優しく教科書

ノートを見させてあげます。でも、鹿目まどか、美樹さやか teme からは駄目だ」

ビシッ！ 人差し指でまどかを指し、小指でさやかを指した。

「ちょっと酷いよソラ！」

さやかはかなりご立腹のようだ。

「あはははは……」

鹿目はどう反応していいのか解らず、ただ苦笑しているだけだった。

「まつ、そんなことはどうでも良い！ 先生！ 早く指定！ 席を早く決める！ ハリーハリー！！！」

ほむら氏は冷たい視線でオレを一瞥した後、前の方に空いている席に座った。

NO！！ 変態がいけないのか！ 変態性がいけないのか！ めくるめくる美の世界。百合とかレズとかいけないと思います！

「あれ…アレ……おかしいな……涙が出てきた」

「とりあえずソラ君席に着こうね」

そして、HR後。

「結婚してください！！！」

「「「「「キヤーー!!」「」」」」

周りから黄色い声上がる。突拍子もないが今の状態は、ほむら氏の目の前で片膝を付き、婚約指輪を贈呈している。

「迷惑よ……」

「アイキャンフライ!!」

あまりの返答に、窓から脊髓反射的に飛び降りてしまった。

「ただいま」

「おかえり」

そして即座に戻ってきた。稀にのってくれる人がいるから兄さん嬉しいよ。

「なんでなんだ……! 教えてくれほむほむ! オレのどろが悪いんだ!」

「……………」

ほむら氏はスルーを決め込むつもりのようなのだ。

「ソラ君。それじゃ暁美さんの迷惑だよ……」

「鹿目まどか。貴様は邪魔だ失せろ……」

パーン！！

ほむら氏がオレにピンタをしたようだ。……でも、残念　ベクトル操作出来るから痛くも痒くもないんだな。

「っ！！」

「大変だ手がこんなに腫れて……ペロペロしてあげようか？」

「貴方一体なに？」

「オレは変態という名の紳士だ！」

言い切ってやった言い切ってやったぞ！

「貴方がまどかの障害になるっていうなら、私は貴方を倒すだけよ」

ガタン！！

ほむら氏は勢いよく立つとまどかの席まで近寄った。

「保健員は誰かしら？　ちょっと気分が優れないみたいだから、保健室まで連れてってもらえないかしら？」

「ゴメンwww保健員オレだわwww」

「……鹿目さんちょっと連れてってもらっていいかしら？」

ちょｗｗオレのことスルーかよｗｗ

ジーーーーッ

現在じっくりねっとりと、ほむら氏の生足を観察。

「ぐっ！！ 傷が！！ 古^こ来^こより伝わりし俺の右腕が解放される！ それ傷じゃなくなね？ 傷ですよ！ よく見てね！ ってｗｗｗｗ いつの間にか置いてかれてるおｗｗｗｗ」

一人芝居を始めている内に、ほむら氏とその他1が保健室に行ってしまったようだ。

クラスからの視線が若干冷たいが、そんなことは気にならない。

「おい、田村。ちょっとオレ先祖返りが起きそうなんで保健室に行ってくるから、先生にはそう言っておいてくれｗｗｗｗ」

「馬鹿だろお前」

「はぶん ばか！ 馬鹿！ ？！（ばか） 知ってるか？ 馬鹿は愛されるんだ！ 馬鹿は褒め言葉だ！ アホはアホだアホはどこまで逝ってもアホにしかならない。馬鹿とアホは同じのようですうでない」

クンカ！ クンカ！

この頃鼻を鍛え始めたら、少女臭にも多少なり違いがあることを知った。これノーベル科学賞に出せんじゃねえのWWWうえうえWWW
ほむら氏からは豊潤な香りが。

その他1からは下呂を拭いた後の雑巾の臭いがする。

追跡D A Z E

「えっとさ、保健室は……」

「こっちよね」

先導する人が後ろってなにWWW

「え？ うん。そうなんだけど」

「何かしら？」

「いや、だから、その、もしかして……場所知ってるのかなって」

「……」

不意にほむら氏が足を止めた。その他1の方へくると振り返り、早口にしゃべり始めた。

「鹿目まどか。貴女は自分の人生が貴いと思う？ 家族や友達を大

切なにしてる？」

「え、えっと……私は……。大切なだよ。家族も友達も大好きで、
とつても大事な人たちだよ」

「本当に？」

「本当だよ。嘘なわけないよ」

「そう、もしそれが本当なら、今とは違う自分になるうだなんて、
絶対に思わないことね。さもなければ全てを失うことになる。あな
たは鹿目まどかのままでもいい。今まで通り。これからも」

中二病発言ありがとう。またの名を電波という。得体の知れない少
女ってなんかグツ！ と来るよな。

ほむら氏の能力がたしか『時間操作』だったかな、テラチートWWW
時間を止めてる間にペロペロするんですね。分かります。

その他1は律義にも授業に戻るようだ。オレは戻らずほむら氏の後
を追う。

フフフツ……。今こそ蛇の力を使うとき！ ダンボールは大丈夫か
！ 迷彩服は着てるか！ 選択肢前のセーブは忘れずに！ GO！
！ GO！！ GO！！

スニーキングミッション開始！！

「貴方さつきから私の後つけてきて、用があるならハッキリしなさい。これ以上ストーカー紛いな行為を続けるなら先生に言い付けるわよ」

「何故ばれたし！」

「そんな目立った格好に奇怪な行動は目につくわよ。ばれない方が可らしいわ」

「大佐スニーキングミッションが失敗しました……ガクツ！（声色を変えて）しっかりしろ！スーク！スネー！」

「そういうところが目障りなのよ貴方。クラスの迷惑考えたことある？自分の行動を客観的に見てみることをオススメするわ」

「結婚してください！！」

「……これ以上ふざけると私だって怒るわよ……」

「用は何？って聞かれたから答えただけじゃん。怒られる言われはない！」

「なら、ハッキリ言っておくわ。答えはNOよ。これ以上私に付き纏わないで」

そう言っつて保健室へ去ろうとするほむら氏。

「鹿目まどか……」

ピクツ！足を止めこちらを振り返った。

「ケロケロケロケロWWW」

けすることが出来なくもない『ちょwwwwwwオレTUEeee
eeeeeee!!!wwwww』な状況にいる立場だし、本格的な情報操作なんておてのものさ。一言で言うとオレ神様だな」

真ともに喋るオレかつこいい……。

「よまい言を……証拠はあるのかしら？」

「では……証拠を見せる。『へい妹子お手』人の話しを聞かんかいこのアホが!!』『ギャー!!だつてワンちゃん大好きなんだもん!』『ワン!!』そして逆立ちし始める犬。ただの逆立ちだったら驚くだけで済んだが、逆立ちしている場所が悪かった。犬は全体重をかけて眼球を押し潰していく……『ギャー!!』『早く退けるその犬を!!』《グリーンフシード》具象化」

「……うそ……」

周りには何十という数でグリーンフシードがバラ撒かれた。何も無い空間から突然現れたのだから驚いて当然である。ほむら氏も驚いている。それと、グリフシードは魔女を倒さなければ手に入らない。つまり最低でも10体倒さなければならぬ。とほむら氏は考えているかもしれないが、違うからwwwwww違うからねwwww

オレ最後なんて言った？ 具象化だよ具象化!! 気分爽快wwww
wwww

「対価だパンツ寄越せwwwwwwwwwwうえwwwwwwうえwwww
wwww」

「え？ 私そんなの聞いてないわ……」

第二

巴マミのマンションにて。

「全く勿体ないじゃないかww」

白く可愛いらしい生物が、ガサゴソとごみ箱を漁っている。

「あつた。コレコレ」

中から出てきたのは女性物の下着……Tバックであった。

「はむはむはむ。キュップ……」

兎にも似た生物はソレを食べたあと満足そうにゲップをした。

『おいQBww』

何処からか声が聞こえる。、音をする方を辿るとそれはQBと言われた生物から聞こえてくること気が付く。

「円環の理ww」

『ティロ・ファイナーレww』

何かの合言葉なのだろうか、お互いがお互いを確認しあっているようだ。

とある方が聞いていたら涙をドバドバと流していただろう。

『日々精進に変態性を磨いてるな、オレ達にはもう理解出来ない領域逝ってんぞww』

「変態つて僕には理解出来ないよww」

『ちょww素でやってるのか！？wwさすが地球外生命体オレ達のもの差しじゃ測れねえwwでもやり過ぎには気をつけるマミ氏にテイ口られるぞwwww』

「ティロ・ファイナレwwww」

『中二病乙wwww』

「で、用件はなにかな？」

『用件：用件かwwねえよwwふと思いついたから連絡してみたんだけどおww』

「wwwwwwねえwwwwこの会話外まで丸聞こえだよねww情報駄々漏れしすぎww」

『電話だからなwwwwQBは受話器、オレは電波wwww』

「それは脳内妄想だけに留めて欲しいんだけど……」

『無理wwww』

「だよねwwww」

『あ、そうそうQBはこの後幼女狩りに出掛けるのか？WWW』

「違うからWWWちょっと魔法少女になりたがっている子を勧誘して
くるだけだからWWW」

『さすが汚いWWWインキュベータ汚いWWWあれは詐欺だろWWW』

「僕には理解出来ないよWWW」

『都合のいい頭だなオイWWW』

「確かこの辺りに、凄い潜在魔力を秘めている子がいるんだけど…
…君は知らないかい？」

『鹿目まど……雑巾臭のするアイツだろWWW』

「雑巾臭WWW」

『匂いを辿れば分かるはずWWW』

「OK把握WWWじゃ行ってくるよ」

『健闘を祈るWWWオレは昼休みに一人飯してるマミ氏のとこ行って
くるからWWW』

「テイロ・フィナーレWWW」

『円環の理WWW』

場所は変わり、三年の教室。

三年の教室に突撃。目標確認……。やはりぼっちで食ってやがった
www友達いねえのかよwww

「ティロ・フィナーレwww」

「ちよつと表出しましょうか……」

ちよwwおまww即襟を捕まれズルズルと引きずられていく。

痛い痛いww首が絞まるww

ズルズルと引きずられながら屋上まで運ばれた。階段の段差で尻が
痛いwww

……ナイスアングル……。

パシャパシャ!!

「何してるのかしら……」

声のトーンが目茶苦茶低いww怒らせたかもしれないwwだけど
やめないww

「マミ氏って可愛いからさ……こつ、反射的にカメラを構えたくな
るんだww」

「それ以上何か言ったら屋上から突き落とすわよ……」

「うえWWWうえWWW」

ガチャー！！

「『はい』でしょ……」

何もなかった左手に、いつの間にかマスキット銃が握られていた。ニコニコと笑いながらマスキット銃をオレの額に押し付け、脅迫に似た脅し文句を言ってきた。

このままだと殺^やられるWWW

「まったく……あなたからは反省の色が見えないわね。そんなことばかりやっている、いらないうところで足元をすくわれて大惨事を招きかねるわよ」

溜息をつき、オレの額に押し付けていたマスキット銃を消滅させた。それにしたって何故武器がマスキット銃なのだろうか？

魔法少女らしくない物騒な武器にちよつとオレはときめくが、銃だと手加減出来ないかWWW

まさかWWW銃で撲^{なぐ}るなんて暴拳に出ないよなWWWマスキット銃は鈍器じゃありませんよWWW

「細かい話しは屋上でしましょ……」

「了解WWW」

また、尻を引きずられながら階段を上るwww尻が痛いwww若くして痔になりそうだおwww

屋上にて。

「で、何か申し開きはない……?」

「ティロ・フィナーレwww」

まずったwww反射的にティロ・フィナーレって言っちゃまったおwwwこれはマミ氏の逆鱗に確実に触れたwww最初から触れてるけどなwww

「ティロ・フィナーレ……なにか可笑^{おか}しいのかしら?」

「いえwwwまったくwww」

「決めた貴方を吊すわ……」

ヒュルヒュルと何かがオレに巻き付き肢体の自由を奪った。

ドカ!!

マミ氏に蹴られ屋上から真っ逆さま。そのまま頭を地面にぶつけ死亡。なんてことにはならないwwwばんじーじゃんぶwwwまさにそれだった。屋上からリボンで固定され、それ以上落ちないようになっ
ていた。

「少しは頭冷やしなさい……。人を馬鹿にするからこんなことにな

るのよ。以後心を入れ換えて、誠実に慎ましくするっていうなら助けてあげてもいいわよ」

「だが断るwww」

自重はしない絶対しないwww自重しないでゴサルwww自重しないでゴサルwww絶対に自重しないでゴwwwザwwwルwww

「あら、そう。なら誰かに気付いてもらうまで、吊されていればいいわ」

「ちょwww行くなwww腹いせにお前の家の前で」さっさとくたばれPTA』を熱唱してやるぞwww」

ビューン！

……風が……。

「揺れるwww揺れるってwwwブランブランwwwうえ気持ち悪wwwリバスしちゃうwwwリバスするとこ見られちゃうwww」

場面は変わり二年の教室。

鹿目まどかは偶然外を見た。

そこには、リボンらしき物に吊されている北沢宇宙の姿が見えた。

「……今日はいい天気だねさやかちゃん」

見なかったことにしたらしい。

「出席をとります……北沢君は？」

「先生！ 北沢だったら三年の教室に向かつてからは行方不明になりました！」

「あら、そうなの……暁さんは北沢君のこと何か知ってますか？」

「なんで私が知ってるんですか……？」

「全校で有名な噂よ、なんでも彼氏彼女の過程を吹っ飛ばして、いきなり結婚してくださいって北沢君に言われたそうじゃない」

ヒュー！ ヒュー！と周りからは歓声上がる。

「……授業前とは思えない前フリですね。そんなふざけた情報はいつたい誰が流したのか先生はご存知ありませんか？」

「北沢君本人が全クラス回って言い触らしていたけど……」

「そうですか……ありがとうございます」

「……さやかちゃん今日は天気良くて風が強いみたいだよ」

「さつきからまどか天気の話しかり……今日は転校生とアホのせいで疲れてるのか？ 幻覚が……もといアホの姿が見えた気がする。ねえまどか……何かあそこにいない？ 誰か吊されてない？ 見たことある顔なんだけど……って何かきた！」

パリーン！！

窓ガラスが綺麗な具合に粉々になり、破片が飛び散るが、幸い誰ひとりとしてケガした人はいなかった。

「ゴロゴロゴロゴロ！！ 北沢は北沢はかつこよく擬音語を使ってみたりww」

誰もが呆然となった。誰も教室の2階にある『外』の窓から現れるとは思っていなかったからだ。

「よっこいしよ」

いつものように北沢は席に座った。まるでなにもなかったかのように……。

「ティーチャー授業しないんすか」

「あ、はい！ 日直」

「きりーつ。礼」

そして授業が始まった。内容は数学で中々に難しい問題だった。

それを見ていて電子黒板はだけ異様に技術力が高いと思ったのは北沢のみである。

「暁さん。前に出て来てこの問題を解いてください」

そう言われほむらは、黒板まで歩み寄り次から次に問題を解いていた。ほむらからは一瞬の戸惑いすらも感じもらえなかった。生徒も先生もその光景にただ呆然としていた。速いなんてものじゃなかった。まるで最初から解答を知ってるような動きだった。

「はい！ よく出来ました」

「ほむほむ可愛いよ！ ほむほむかっこいいぞ！ ほむほむ最強！ ほむほむはオレの嫁！」

「北沢君うるさいですよ。授業中なんですから静かにしてください」

「嫌でゴサルwww」

「なら前に出てきてこの問題解いてみてください。できなければ授業中は静かにすることいいですね！」

「先生そんなこと言っていていいんですか？ オレが真剣マツでやったら世界が改革起こしますよ。オレってばGODだからさwww世界の一つや二つ楽勝だぜwww」

「はいはい、口だけの子は素直に授業を受けようか」

「ふっ……しかたないおwww北沢宇宙ら（当て文字）そして参る！！」

北沢が電子チョークを持った瞬間北沢は倒れ込む。

「なんてことだwww世界がオレを拒むだとwwwオレにはチョークを持つ資格さえないというのかwww指がガクガク震えてやがる

wwオレには出来ない！ この手で世界を壊すことも、世界を歪めることも……オレには大罪人になる資格さえないというのかwwこの真実を知ってしまったほむら氏は死ぬか愛されるかどちらか選択しなければならぬ……ならオレはほむら氏を愛そう！ラ〜ラ〜ww

まるで演劇……だが、その役者である北沢は大根役者。なにを調子に乗ったのか北沢はクルクルと回り始めほむらの席まで近付いた。

「『子作りしましょ』」

どこの最強の嫁のOPを歌いながら、ほむらに向かってウィンクした。

これは既にセクハラで訴えられてもいいレベルである。現にほむらは眉をひそめ嫌悪感を表わにしていた。これを見てもまだ歌い続ける北沢は本当に刑務所でブタ箱に送られた方がいいと思う。

こんなことをしていても未だ警察沙汰になっていないのは、権力による圧力、金にものをいわせた賄賂とコネ、そして魔法（？）の力のお陰である。

実はこの学校の最高権力者は北沢宇宙である。これは生徒も先生も知らないことで、学校成立時に多額の補助金とコネを盛大に活用した力押しである。

校長先生は北沢がかなり偉い人物であることを知っているのだから何も出来ないし、下手したら自分がクビになるのでなにも言わない。

先生方からの苦情が殺到しているが、何も対処出来ないのが現状である。

「北沢君みんなの迷惑になるし、歌はちょっと……音楽の授業になつたら好きなだけ歌っていいから……だから、ね？」

遠慮がちに声をかける先生に見向きもせず、ただ真つすぐにほむらの方だけ向き熱唱し続ける。

暁ほむらは考えていた。

「（まったく、なんなのかしら彼。居るだけでソウルジエムが濁りそうになるほどの嫌がらせ……それに引き換えグリーンフィードを渡すような行為。駄目……彼の目的がまったく見えない）」

こつも煩いと怒鳴ってやりたい気持ちもあるが、そうしてやるとますます付け上がってくる可能性があるので、無視を徹底的にしている。

「（私は何度もループを重ねているけど、……彼……何者なの……？）」

インキュベータに聞けばもしかして知っているかもしれない。

キーンコーンカーコン

「チャイムが鳴りましたね日直さん……」

ゲツソリとした先生の表情に生徒全員同情せずにはいらなかった。

「はい！ きりーっ！ 礼！」

授業中にも関わらずセクハラソングを熱唱していたあの北沢も、意外であるが終わりの挨拶をした。

「最初から素直なら苦労しないんだけどな先生（涙）」

「常に自分をさらけ出してますよ先生……。自重はしなでゴサルW。シリアスも嫌いでゴサルW意地があんだよ男の子にはな！！」
W W W
「」

第三

「ふはははあ！！ 今日ば晴天なり。魔法少女よ（キリッ）魔力の補充は（キリッ）充分か！（キリッキリッ）」

現在魔法少女との戦闘を予想して闘う時の台詞をどれだけかつこよく言えるかデモストレーションを行っている。

……授業中に。

クラス中の生暖かい視線を背に受けながらも、北沢はがんばる。

「違うか……魔法少女?! マジきもい!! 魔法少女が許されるのは小学生までたよねww」

スパーン!!

良い音が教室中に鳴り響いた。

「おーい北沢……余裕だなオイ……この問題解いてみるや」

そこには体育体系がピッタリと当て嵌まるような、ゴツイ先生がいた。

「あ、手が滑った」

北沢は片手を挙げると、まるで見えないような力に殴られたかのように体育体形型の先生はよろめいた。

「（座標軸確定率操作開始）」

先生はよろめき姿勢が安定しないのか、バランスを崩し倒れ込んでしまった。

しかし、倒れた場所がいけなかった。

「えっ……！？ キャー！！！！」

女子特有の甲高い悲鳴は、教室中にいる生徒の耳に痛いほど聞こえた。

「性犯罪者ブギヤー！！WWW」

北沢は笑いながら先生を指差した。

先生の顔が女生徒の下腹部……にまるでうずくまるような状態なのだ。特に口と鼻の場所がまずい。

先生は気絶してしまったのか一向に動く気配がない。

「理解したか……これが、殺す（社会的抹殺）ってことだ」

ガラガラガラ！！

「さっきの悲鳴はなんですか！？ って吉田先生何やってんですか！！？」

「クンカクンカ！！ すはぁ！ すはぁ！ 良い臭いだ良い匂いだ

「！」

つと北沢誰にもばれないように腹話術& a m p ; 声色を吉田先生と同じにして、更に社会的に崖っぷちまで追い込んだ。

「……………うわぁ……………」

誰もがドン引き状態である。

「……………」

被害者の女生徒はまるで糸の切れた人形のように、身動き一つしない。完璧に放心状態であった。

うつすらと涙が見えるのは気のせいではないと思う。

この状況の收拾しゅうじゅうにすぐ動き始めたのはこの騒動の張本人北沢であった。

すぐに吉田先生を女生徒から引つぺ剥がし、吉田先生を地面にほうり投げ。女生徒に抱擁した。

「よし、よし。恐かったね辛かったね。がんばったね……………うーんと
かんばんったね偉い偉い。大丈夫君が恐がる原因はオレが取り除いた
から恐がることなんてないんだよ、君が落ち着くまでオレはこうし
ててあげる。君の苦しみも痛みもなにもかも分かち合おう。だから
泣いても良いんだ……………オレが受け止めてあげる。なんたって『クラ
スメート』なんだから」

女生徒の頭を撫でながら、満面笑みを浮かべた北沢がいた。

その笑顔に誰もが魅とれた。

そして同時に思った。

「……………(コイツ誰だよ!?)」「……………」

この一瞬まるで聖人君子のように慈悲深く、優しい善人がここにいた。

クラスメートが知っている北沢は、末期の中二病患者も真つ青な行動を平然とやって退ける人物だ。

「うわああん!! ぐすつ……………ぐすつ!」

女生徒は声を漏らさないように、誰にも泣き顔を見られないように、声を殺して北沢はの胸の中で泣きじゃくった。

その頃北沢の心境といえば。

「(吉田社会的抹殺計画完了ww オレは偉いからな被害者の心のケアは大事にするのだよ)」

人はそう変わるものでないことだけは分かった。

「ティーチャ。ちょっとこの子保健室まで連れていくから、そこに倒れている性は……………吉田先生を警察署へ」

「……………分かった……………」

しばし葛藤があったようだが、何が分かったんだ。

北沢も若干ネタで言ったので、了承されるとは思ってもなかった。むしろツッコミを期待していたので残念であった。

「立てる？」

「うっ……はい……」

精神的ショックが大きかったのか表情が暗かった。

「人って人との繋がりをとてても大事にする……。人は一人では生きてけない……。多過ぎても生きてけない……。アイデンティティーを確立させるのは自分自身……。他人と自分を比べて優劣を決める。当たり前だけどさ、こう難しく言うとかっこいいだろ？」

ギョツ！！

「暖かいだろ？」

「……はい……」

「……ｗｗｗｗ……うんそうだねｗｗｗｗ」

無理ｗｗこれ以上シリアスとかオレ死んじゃうｗｗ

「早く保健室行こう……」

手を握ってるのでついだから引っ張って行こう。女生徒は俯き、

動こうとしない。顔を上げる気配も感じず、ただそこにただずんで
いるだけだった。

引っ張って行けばついて来るでしょ……たぶんww

テクテクテクテク……。

ガラガラガラガラー！！

「先生！ 緊急患者さんです！！ 一刻を争う事態なので先生は早
急に出てってください！」

「おまえ何する気だよ！！！」

「さあwww？」

とりあえず保健の先生にはここから退場してもらった。

催眠術で先生の頭の中をパーン！！ して、一時的な記憶を消去
させていただいた。後遺症が残らない程度に手加減したが、手違い
で大切なメモリーまでパーン！！ したかもしれない。まあ、自分
さえよければそんなことはどうでもいいwww

そうなると保健室で二人つきりな状況が出来上がるわけだ。怪異事
件の一つや二つ起きてもしかたないよねww

オレは立っている女生徒をベットに座らせると、手をベットに乗せ、
体重を掛ける。ギシリッ！ とベットが軋む音が聞こえる。体重を

乗つけたせいかな僅かながらベットが沈む。若干女生徒が怯えてるよ
うだったので、オレは安心感を与えるため微笑しながら近寄った。
身を乗り出しながら女生徒が怯えないようにするのは至難の技であ
る。

「では……オホン……オレと契約して魔法少女になってよww」

QB ええエ〜のマネww

なんとなくであるがQBの邪魔をしてやりたいww

魔女狩りの邪魔をしてやりたいww

しかし、QBの本来の目的が感情爆発によるエネルギーの回収だか
ら、魔法少女がバッテリー切れで死んでも関係ない。その前に魔女
化する恐れがあるからだ。

魔法少女として契約を結んでしまえばQBの目的は達成されてしま
う訳だから……本当に邪魔したいなら『司令塔』やら『本体』やら
をぶっ殺してしまえばいいわけだ。

まあ、適度に邪魔してあげるのが楽しいわけで……デュフフwwww
魔法少女から使命を奪ったらどうなるかなwwww

「え……?」

なにコイツ電波? みたいな目で女生徒が見てきているが、ここか

ら女生徒が驚く姿を思い浮かべるだけで心が高鳴る。

「奇跡も魔砲もあるんだよ!! W W W」

ヤベえ〜 W W W 変換ミスしたお W W W

「北沢君大丈夫? ……ごめんなさい……これが北沢君の普通だったね……」

悟られてる W W

「……百歩譲って魔法があると信じて……北沢君が魔法をあると証明出来なきゃ北沢君のただの妄言妄想、架空にあるお伽話だよ?」

うん W W そうだね W W

「ほうほう W W ならあることを証明できれば奴隷でもなんでもなると W W?」

「いや、それはちょっと……」

「なら仕方ない。オレもそんなに鬼畜じゃない、あると証明出来ればオレと契約して、魔法少女になってもらおう Z E」

「……うんいいよ」

未だ信じていないようだ W W 『信じる物は救われる』とどこかの宗教にもあった。信じようぜオレのこと W W

「契約はどうするんだああアア！！WWW」

「勝手にやっててください！」

「しかし残念でした。貴女は既に選択肢で『はい』を押ししてしまったので、本体かソフトを破壊しない限り強制的に魔法少女になってしまうのだ！WWW」

保健室の周りに結界を張って外に出られなくした。これで逃げられることはなくなった。そして外の時間と中の時間をずらして、決断するまで永遠にここに居てもらおうことにした。

まずい……今の状況はエロゲー的な展開しか思い付かない。オレ重傷WWW

ガタ！ ガタ！ ガタ！

「あの……扉が開かないんですがこれは北沢君の仕業ですか？」

「はい DE ス WWW」

「すみませんが空けてもらえませんか？」

「オレと契約したら良いよWWW」

「なら、契約内容が記載されている用紙をください。それが無理ならここを空けてもらいたいですけど」

コイツ、無茶ブリをかけて逃げる気満々だ W W W

……けど、甘い……甘いんだおおお!! W W W

「タネも仕掛けもあります。指パッチンってね! W W W」

指を鳴らすと契約内容が記載されている用紙が現れ、女生徒はかなり驚いている。

そんなんで後先もつかね W W W

なんか卑猥だぞこの台詞 W W

「はい、どうぞ W W W」

「分かりましたよ……」

渋々女生徒は用紙を受け取ると契約の内容を読みはじめた。

「1。指示には出来るだけ従うこと」

「メロンパンとアンパンを購買で一つずつ勝ってこい。あとオレん
ジジュースを頼むお W W W W」

「調子に乗らないでください」

「ですよね」

「2。殺生行為は出来るだけ避けること」

「騙して悪いが、これも仕事なんadena。
なにッ！！メインブーasterがいかれただと。by水底ランカー
1位」

「それ関係なくないですか？」

「火薬の匂いがするぜ！ 的な感じでなんとなくだwww」

「3。機密情報は外部に漏らしてはいけない」

「機密が尻から出るならば、仕方ないと妥協してやるさwww」

「帰って良いですか……？」

「NO〜そしてキングクリミゾン！！」

「え……？」

色々な過程を飛ばす。

玉瀬しおりが魔法少女の仲間入りを果たした

「リリカルマジカル」

「AB！」

「僕達はずっと仲間だ！」

「が、掛け声なので覚えといてねwww」

「もう嫌だこの人……」

第四

薄暗い中、白く兎にも似た生物QBと見滝原中学転校生『曉美ほむら』がいた。

ほむらの手元には黒くゴツイ物体が鈍く光輝いている。

バン！バン！バン！

銃弾はまるですいこまれるかのようにQBに直撃、身体には無数の風穴かさあなが出来上がる。

「ちょwww痛いじゃないかほむらwww僕にいたいどんな恨みがwwwあるんだいwww」

どこからか声が聞こえてくる。それは今死んだばかりのQBと同じ声だった。

「貴方本当にQB……?」

ほむらは疑問に思った。数々のループを繰り返してきたが、ここまで感情豊かな（このQB人を馬鹿にしてるような気がする）QBには会ったことがない。

「見て分かるでしょwwwマツスルプリティボディから放たれるこのオーラがwww」

そう言うとQBは柱の物影から姿を現した。まるで雪みたいに真っ

「怖い怖い目が怖いwwwまるでヤンデレだねwww」

バン！！

引き金を引く。それと同時に出来上がる死体のオブジェクト。血は出ていないものの、QBは全く身動きしない。

「実体のある影分身なんちって」

まただ……人柱の影からほむらの足元にいるQBと全くそっくりな兎もどきが現れた。

バン！バン！バン！バン！

「命は捨てるもの」（キリッ）

殺しても殺しても、次から次へと現れてくるQB。ほむらは拳銃を仕舞うと少し間を置いて考え始めた。

「やめたわ……これ以上は弾の無駄遣いだもの……」

「ん？ もうwww終わりがいいwwwじゃ僕は素質のある子と雑巾臭漂う人を探しにいくんでwww」

「……殺さず捕まえれば良いのよね……」

「……！ 良い発想だねほむらwww」

「速い……！」

「脚なんて飾りだよwww偉い人にはそれが分からんとすwww」
「耳を使って二足歩行してる兔もどきには言われたくないわ……」

QB……インキュベータの本当の姿は人と掛け離れている。『脚』
なんて概念もないし、『歩行』という移動そのものが存在しない。
兔のような姿をしているのは、人の警戒心そのものを薄めるためだ
けであり、インキュベータ自身のもつ姿とは掛け離れている。

バン！

「うわぁwww僕の片耳があぁ！！wwwなんとというゴルゴ13w
ww」

「鬼ごっこはもう終わり……覚悟なさい……」

「だwwwれwwwかwwwヘルブミーwww」

「呼ばれてないのにじゃじゃじゃ〜ん」

グシャー！！

なにもない空間から突如北沢きたさが現れた。そして瀕死状態のQBに止
めをさした。

ほむらは突然のことに驚いたが、すぐさま表情を戻し、周りを見渡
す。

「ありがとう北沢wwwこれで、万全の体勢で逃げられるよwww」

また別のところからQBの声が聞こえる。

「殺されてお礼言うとかMかよQB W W W」

「貴方はたしか……同じクラスの北沢宇宙……。貴方私の邪魔でもするのかしら、邪魔しないならさっさと消えて邪魔するなら……悪いけど病室のベットで生涯過ごしてもらっわ」

「おお〜ほむら氏俺を再起不能にする気満々かよ W W W」

「私の目的はそこにいるQBの捕獲よ……別に邪魔さえしないなら貴方には危害を加えないわ」

「助けて北沢 W W W」

「無理」

「ですよね W W W」

「俺ほむら氏のこと好きだからさ W W W ちょっとQBには捕まってもらっわ W W W」

「僕達の友情は！ W W W」

「ねえよ W W W ということで《魂の牢獄》」

「っわああああ W W W」

みるみる内にQBが小さくなっていき、宝石へと姿を変えた。

北沢は地面に落ちている宝石を拾うと、ほむらに差し出した。

「はい、どうぞwww」

「えっ……？ 意外にあっさり解決したわね。なんだったのかしら私の苦勞は……北沢宇宙ありがとう」

「ほむら氏のためならお兄さん頑張っちゃどうぞwww」

「ほんと貴方変態だけでもいい人みたいね……でも、貴方本当に何物……？ 魔法少女でもないのにQBを閉じ込めたり。私の前に急に現れたり、あまつさえ私に告白するし。……もう一度聞くわ貴方は何？」

「あえて言うなら神様？www」

「は？ 貴方正気？」

「な訳ないじゃんwww後パンツくれwww」

「……感謝はしてるわ……じゃ、明日また学校で」

「あ、そうそうwww《魂の牢獄》について説明しなきゃなwww」

「貴方のそれわざとらしいわ……」

「《魂の牢獄》には実は維持コストがありましてwww一日に一回異性と性交しないと砕け散りますwww」

「訂正するわ……貴方って本当に屑ね」

「俺はもう準備満タンなんだけどwww」

そう北沢が言うのと北沢が着ていた服が砕け散り、スッパンパンになった。だがしかし、世界修正のせいか股間にはモザイクが掛かっている。

「……私……」

僅わずかながら頬を染める。

それと同時に目を背けてはいけないと本能が告げる。

北沢宇宙からは異常なまでのオーラと威圧感が感じられる。これまで戦ってきた魔女などと比べものにならないほどだ。

背けた瞬間犯られる可能性を否定出来ない。

ほむらは悩んだ。親友……鹿目まどかを魔法少女にさせるには、前提条件にQBが存在しなければならぬ。だが現在北沢が『魂の牢獄』という能力により、QBを宝石へと変換され、人と対話が出来ない状況に陥っている。今の状態が続けばこれ以上魔法少女は増えないだろう。

だが、それは確実なのだろうかと疑問に思う。

今のQBが死んでも別のQBが現れる。

それはほむらのループの中で証明されたことである。

かと言って『時間停止』を行っても逃げられるかは分からない。

……コイツ……北沢宇宙はインキュベータよりもヤバイ存在であると曉美ほむらは確信を持って言える。

逃げてもアウト。

応じても色々とアウト。

……貞操でまどかが助かるなら……私は……。

「ほむらちゃん……」

「転校生！」

「まどか……それに美紀さやか」

「なんで北沢君裸なの！？ ほむらちゃん……どういふことが説明してもらえるかな」

「薄暗い密室で男女二人……言わなくても分かるよねWWW」

「分からないよ……そんなのってないよ……」

「まどか……」

「出来るだけ早くしてくんねえWWW全裸待機はさすがに寒いWW

「W

「転校生とりあつずこの変態から逃げよー!!」

「美紀さやか……。!! こんな時にまさか魔女」

「玉瀬君殺つちやいたまえWWW」

『了解しました』

回想シーン

これは玉瀬が魔法少女になった後の話し。

『あ、なんか願いごとあるなら言ってみ〜WWW』

『突然なんですか……。?』

『いや、なんかもらいばなしだなと思ってなWWW』

『私なにも北沢君に与えてないと思うんですけど……』

『なにを言う! しっかりネタを提供してくれてるじゃないかWWW』
『W』

『あゝなるほど分かりました。ならお言葉に甘えて……。って北沢君
そんなことも出来るんですか?』

『一部除いてなんでも叶えられるぞWWWなんつてたつてGODですからWWW』

『ほんとただの中二病患者かと思っていたら、実は本物だったなんて……まさにファンタジーですね』

『で、願いごとは何かなWWW』

『私の願いは……保留で良いですか……？』

『まあいいかWWW』

『それにしたつて、この格好どうにかなりませんかね……』

『諦める』

成り立ての魔法少女『玉瀬しおり』魔法少女として与えた特典能力はヤウ、アイぐらい強いのだが、それでも素人、まだまだひよっこなのだ。それでは戦力的に微妙なため北沢は玉瀬を鍛えた。

結果……。

『こら逃げるなワルプルギス！』

ラスボスを軽々と撃退しました。

回想終了

「一方バマミは……。」

「ここら辺から魔女の魔力を感じるわ……。」

バマミは学校の放課後毎日一人で魔女の探索を行っている。

バマミはこの地区を担当する魔法少女であり、町の平和を守るため魔女を狩りつづける存在だ。一人（・）孤独に生きている……マシでぼっち……マンション戻ってもぼっち……唯一友達と思える存在は、バマミをあ痛^{いた}たな魔法少女にした元凶のQBと変態凶悪最低最悪北沢宇宙ぐらいなものだろう。

「ディフェンス！ ディフェンス！」

「なんか居るわね……。」

そこにはなにか怪しい動きをした北沢宇宙がいた。

これは北沢がバマミがここに来ると確信して用意した。『ブンブンディフェンス北沢第一号』人の通行を邪魔することだけに特化されたダミー人形だ。その威力は凄まじく、手足を砕かれようが核を破壊されようが地区を消滅させようが、関係なくブンブンとディフェンスしている。

「邪魔よ北沢」

「チュウニビョウウイタイ」

「貴方も人のこと言えないでしょ……！」

「……ブンブン！ デイフェンスデイフェンス！！」

「ごまかそうしても無駄なんだから！」

「ゴマカシテナイズ」

「ん……いいわ今日という今日は許さない……本気で相手してあげるわ！」

回想……………。

あれは今から十年以上の話し。

（私は死ぬの……？）

バママは父と母との久々のドライブに（○）（○）（○）（○）（○）して
いた。

そして……。

車衝突

父母ペッシャンコ

バママの息

ヤウ アイ

省略し過ぎたが、こんなもんだらう。

「僕と契約して魔法少女になってよ」

これが初めてQBとの接触であった。

「大丈夫大丈夫www後2回は死ねるから」

そして北沢宇宙との最悪な出会いだった。

北沢が言った後2回死ねるといふ具体的な意味は……。

パッくん（マミられる）

ズキューン（射られる）

の二つである。

更に具体的に言えば。

チーズ（ ）な魔女に喰われ。

（ ）な仲間に弓で撃たれた。

愉快的s……なんでもない。

そんな出会いが昔あったというわけだ。

……だから巴マミの本気というのは……。

魔法少女変身
キラッ

回想終了……。

「ブンブン！！ディフェンスディフェンス！！」

「直撃してるのに傷一つないなんて……」

巴マミの必殺（笑）ティロ・フィナルの直撃に傷一つ付かない北沢がそこにいた。

表情変えず、生身の人間に大砲をぶちかます魔法少女に言われたくない。

魔法少女……プッ
WW
WW

……だからなんだと
いいたい。

魔法少女も魔女も最初も最後も同じだろうか……。

第五

……禁書にトリップ……。

俺の名前は北沢宇宙じゅうよん才。
一端いっぽうのちようのう力者だ。
レベルは6学園最強だ（キリッ）

「インなんとかさんペロペロWWW」

「トウマ助けてー!!」

「テメエなんでもかんでも思い通りになるなんて幻想抱いてんなら
……まず、そのふざけた幻想をぶち殺すー!!」

「きゃー！ カッコイいなWWWケラケラケラWWW」

「テメエー!! インデックスから汚い手を退けやがれー!!」

「ケラケラケラWWW上条さんは神様を殺せるんですよねWWW凄
ーいなあWW」

パチンー!!

「出てこーいWWWMTG産のエルドプール」

そして、時は止まる

「
」

「駄目じゃんwwwさて……」

カメラを録音状態にして……。

声を変えて……。

『ビリビリ愛してる！！！』

と、上条さん似の声で録音したのをビリビリさんに送信つと……。

あ、ついでだから写メも撮っておこうwww

パシヤリ。

ビリビリに送信つと

何故オレがビリビリのアドレスを知ってるかはちよつと前に遡る。

回想シーン

いつものことながら上条当麻は不幸に見舞われていた。

外を歩いていたら、偶然にも見覚えのある後ろ姿を見てしまった。

顔を見合わせるたび「勝負よ勝負！！」と言ってくる。

学園都市に6人しかいない能力者の頂点……それは誰もが憧れる（学園都市科学者は論外）レベル5の第二位御坂美琴その本人である。

これは余談であるが、原作に出てきている筈の第二位の提督様は天界へ旅立ちました。(メルヘンの意味で)

なにかと上条を目の敵にしてくる上、戦闘を起こしたのち電子機器が全てぶっ壊れるという迷惑極まりない存在である。

なお被害者な方々は……。

研究してたら突然パソコンがショートしたんですよ……そのおかげでデータが全部吹き飛びました。by 可哀相な科学者

生命維持装置が停止して窒息死しそうになった……嫌がらせにクーロン大量に作ってロシアとかに出荷した。by 逆さま大臣

影が薄いと皆に言われてきたけど……とうとう……「なにも……見えません!!」と言われた。死にたい……。by

……(気絶) by アルビノのあの方

おじいちゃん!!

by おじいちゃんのお見舞いをしていた少年

色々と本人が知らぬ間に学園都市では問題があちこちと起きたりしていた。

上条は見て見ぬフリ。自然にごく自然に距離を離そうとする。

「死ねえ!!」

「そげぶ!!」

「氏ねじゃなくて死ねwww」

「不幸だあゝ!!」

何があつたのか順序立てに話すところなる。

上条逃走 御坂のソナーに引っ掛かり気づかれる 街中で電撃 そげぶ(その幻想をぶち殺す。の略) 北沢宇宙の野次馬根性全開。上条に暴言をまく 上条さんは後ろに向かって全力ダッシュ 御坂が上条を追い掛ける 北沢がカメラ片手に御坂を追い掛ける。

「こら逃げるな!」

「上条さんにどんな恨み持ってるんですか。不幸だ!」

パシヤパシヤパシヤ。

「逃げるな私と戦え!」

パシヤパシヤパシヤ

ブーン!

北沢の姿がぶれた。次の瞬間には上条の前にカメラを構えながらムーンウォークをする北沢の姿が見えた。

「笑って笑ってwwwそうしたら嫌がらせにインデックスさんに送るからwww」

嫉妬とは恐ろしいものだ。他の女と笑いながら話すだけで「浮気よ浮気！」なんて言い掛かりをつけられる。

ボロアパートに在住のインデックスの場合、上条当麻の身体に噛み跡が残るほど強く噛む。まるでそれはマーキングしてるかのようだ。

「ビリビリちよつとストップ！ 本気でお願いしますから！」

「ビリビリ言うな！！！」

御坂から雷撃が上条に向かって飛ぶ。

「そげぶ！！！」

走りながら右手を後ろに向けて雷撃を防いだ。

だが、完璧に消しきることができなかったのか雷撃の一部が北沢に向かい飛来した。

「アハ」

そう……言っただけだった。なにかの能力を使用した形跡はもなく、ただ、ムーンウォークしながら笑っていただけ。既にムーンウォークをしているあたりで身体強化系の能力者かと思われたが、意外な場所からの確認でそれはないと確証を得られている。

能力者は能力を行使する際に、微弱ながらAIMという力場を発生

させる。無意識なため自覚はできなく、自ら制御は出来ない。

が、能力者にはAIMを利用し、完全に制御出来る存在がいる。確か『アイテム』にいたような……。

LEVEL6。別名、『絶対超能力者』 北沢はそんな名称を貰った学園都市最強最凶最恐生物な人間である。

本気で走れば音速を越え、本気で殴れば地表が歪み、ランランルーをすればドナルトマジックが使える。他に色々な物理学に喧嘩を売っているかのような能力を持つが詳細は不明。

一時期北沢は魔術師ではないかと理事長に疑われたが、ロリコンベースモーカーと聖人の発言により取り消された。

『魔術をなめんな!!』

と、二人は激怒しながら言ったそうだ。

Q ドナルトマジックって魔術じゃないの？

A 魔術は第五元素やルーン文字など色々なありますが、しっかりと等価交換しています。ドナルトマジックみたいなハッピーセットを召喚するだけしたものとは根本的に違います(怒)

それはともかく。

上条と御坂と北沢の話しに戻ります。

「なあ、あんたインデックスを付け狙う魔術師か？」

「いえ、カメラマンですwww」

「うわ……眼帯に包帯グルグルってどこの中二病……」

「超能力者には言われたくねえよwww」

パシヤリ

「ちょっとあんた！ なに許可なしに勝手に撮ってんのよ！」

スパークキング！！

「はっ……！！ まさかのスーパーサイヤ人化！！？ オレも負けられねえwww」

スパークキング！！！！

「調子に乗るな！！」

御坂は地面を強く踏み、高電圧を流す。それにともない電磁波が発生、周りの人の持つ携帯や清掃ロボに被害が及んだ。それは、北沢の持つカメラも例外ではなかった。

「カメラ！！www」

「ふん！ 良い気味よ」

「許さなさい……許さないお！！wwwオレはただ……ディスプレイの前でハアハアしている大きなお友達にプレゼントと思って……最高の素材を確保しただけのに！！www（画像加工的な意味で）……なんでなんだよ……どうしてなんだよ……なんで分かってあげられないんだよ！！www」

「そんないかがわしいことのために私を撮ってんじゃないわよ！」
御坂の能力により砂鉄を一カ所に集め、それを北沢に向けて振りかぶった。

「人体を下位にポテトを上位にハッピーセットを最上位に……ww
www世界よ私は美しい！！www」

北沢は魔術にも似た術式を発動させた。

魔術の中でも禁忌クラス……一時期であるが世界の法則を書き換える世界干渉型の力。

学園都市の第一位である『一方通行』。能力は『ベクトル変換』ありとあらゆる力の向きを操り、物理的に倒すのは無理と言われた怪物。ベクトル変換も世界干渉型といえはそうだが、それは能力全員にも言える。

人の演算なんかで、飛んだり、火の玉を出したり、テレポートしたりなんてどうがんばっても科学的に不可能。いくら頭を弄られようが改造されようが、人の脳なんてしょせん肉の塊だ。自力で出来ることなんて限られている。

だから、世界を自分の都合の良い造り変える。

人の脳はしょせん肉の塊……だが、知覚認識しているそれも脳の情報伝達によって行われる。

人が観測することによりそれは事実となる。

だからこそそのAIM。人から滲み出るそれは『世界』をも侵食する。

以上適当な解説でした

「えい
」

北沢はマクド ルドに販売されているポテトを片手に持ち、御坂に向かい投擲した。

ポテトは音速を越えた。（摩擦熱で燃えるとかいう野暮なことは気にしないでください）

音速を越えたポテトを御坂が避けられる筈もなく、ポテトは御坂の身体に直撃し、御坂の身体は木っ端みじんに吹き飛んだ。

とある魔術のインなんとかさん『外伝』終了のお知らせ

周りには御坂だったものが散らばっており、地面は真っ赤に染まっていた。その光景をみた市民は青い顔をしながらゲロゲロと吐いていた。

上条当麻は涙を流し、御坂の頭を抱きしめながら嗚咽を漏らしてい

た。

そのかん北沢はランランルを通常の3倍の速度で行い、行く度々の方にパッピーセットを配っていた。

「北沢は嬉しくなるとついついやっちゃうんだ　ランランル〜」

「なに呑気に笑ってんだよテメエ……！！　ビリビリがいったい何をしたっていうんだよ！！　たかがカメラじゃねえか……なにも殺すことねえじゃねえか……！！」

「サーセンｗｗｗｗ」

ギロリと北沢を睨みつける上条当麻。反省の色が全く見えていない北沢に殴り掛かろうと右腕を前に突き出す。

「あべしｗｗｗｗ」

北沢は避けようとせず、上条当麻の『幻想殺し（イメージンブレイカー）』の直撃をあっさり喰らい、100メートルほど派手に吹き飛んだ。

その速度は正に音速^{まひく}。周りにソニックブームを撒き散らしながら吹き飛んだ北沢。影響は周りの人達にも及んでいた。

頭がスパーンと切れた青年。

手足が切られ、痛みに泣き叫びまるでダルマのような容姿になってしまった青年。

空に巻き上げられ、地面に叩きつけられて、まるでトマトのように潰れてしまった青年。

被害者が全員二十程の青年である。

どこか悪意を感じるのは気のせいだろう。

「ズザザザッ！！ ピタッ……！！ テメエ………なんにも殺すことねえじゃねえか！！ W W W W だってよ W W W W」

「これ以上無関係な人を巻き込むな！！ うおおおオツツッ！！」

「あべし W W W」

上条当麻に殴られ、またもや派手に吹き飛ぶ北沢。周りを巻き込みながら吹き飛ぶのはもはやデホある。

「あ、もうめんどい……飽きちゃった W W W 殴られるの飽きちゃったよオレ W W W」

またもや殴り掛かってくる上条当麻。

バサッ！！

真っ白な翼が北沢の背中から生えた。

降り注ぐは『天使の羽根』ユラユラと宙を舞う。数十、数百、数万という数の羽根が白く発光している。

上条当麻はその光景を見て、どこかデジャヴュを感じていた。

「オレの頭に常識はねえ！ W W W W」

セラの天使×100

「なんじゃこりゃー！！」

「ブルボッコシンクンクタイム W W W W」

「ちよやm」

セラの天使の攻撃

上条当麻は右腕だけを残しミンチになった

「『悪斬の天使』の誕生のせいで、屑カートのなった『セラの天使』の悲しみが君には分かるか！ W W W W W W 昔からMTGをやってたオレはな、あれを見た瞬間リアルに泣いたぞ！ なにあのスペック差！ ガンダムと歩兵型マツシユルームぐらいの開きがあつたぞ W W W W W W ってあれ……？ W W W W W W セラの天使が暴れ始めた W W W W W W ちよやうっ えエエ W W W W W W」

とある場所にて……。

「まずい……まず過ぎるぞこれは……」

学園都市では見ない格好。マントを羽織り、さっきまでタバコを吸っていた彼は、タバコを落としたことにも気が付かない程に狼狽ろうはいし

ていた。目を見開き、こらは嘘だ嘘なんだと目をこらして外を見た。

「天使の反乱……全ては無へと還るのですね……やっと……やっと彼女が幸せになったというのに……これでは……あまりに彼女が救われない……」

長身な女性は虚ろな瞳。全てを諦めきつたようにただぼくと外を眺める。

天使だ……空を覆い尽くす程の数の天使が空を舞っている。視認出来る情報だが、理解しなくなかった……。

「世界の『粛清』……」

「ああ、間違いなく天使達はこの世界を『粛清』する気だ……ぶざけるな!!」

近くにあった机に拳を振り下ろした。手からは血がドクドクと流れ落ちていく。

「能力者（上条当麻）早く来い!! 早くこんな幻想（悪夢）を殺してくれ!! 彼女と過ごしたこの世界を天使から護ってくれ!!」

B
A
T
E
N
D.
◦

第五（後書き）

《歩兵型マッシュルーム》 マブラヴにいる姿が卑猥なアレ。
《エルドプール》 MTG最強のエルトラージ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3082u/>

全てが酷い！！ 脊髄反射小説

2011年9月1日13時25分発行